

# 本学保育者養成課程におけるピアノ教育のニーズアセスメント

## Needs Assessment of Piano Teaching for Students of Early Childhood Education of our College

小栗 貴弘・岸本 智典・青木 章彦

### はじめに

保育者養成課程における音楽教育が持つ重要性については衆目の一致するところと思われるが、その方法に関していえば様々な可能性がある。技術の進歩や社会状況の変化とともに音楽教育の在り方もまた改善されるべきであるにしても、そうした改善の方向性に関してはニーズ調査に基づく改善案の構想、試み、その効果の検証という実証的・客観的プロセスを踏むことが必要だろう。本調査研究もそうした発想のもと、本学保育者養成課程における音楽教育の改善、とりわけピアノ教育の方法の改善を期し取り組まれた研究の一環である。

近年、eラーニングやICTを活用する音楽教育の実践が増えてきていると見受けられ、それらの実践報告や効果の検証がたびたび行われている。早い時期からのものでは小倉隆一郎による一連の報告、研究がある（小倉、2005；小倉、2006；小倉、2007；小倉、2010；小倉ら、2011；小倉、2012；小倉、2014）。それらの中で、例えば2005年という早い段階のものでは、TV電話を利用したリアルタイム・ピアノレッスンの実験を行い、問題点として、①コスト、②教材作成などの負担の大きさ、③画質・音質の粗さと音の遅れなどが明らかにされた（小倉、2005）。ピアノの指導において、①フロッピーディスク、②ホームページ、③携帯電話の音楽配信サービスの三つのメディアを通して演奏データを配信するシステムを試行した調査では、フロッピーディスクに頼ってしまい楽譜が読めなくなってしまう等の問題点も明らかになったものの、授業レッスンにおいて正しい譜読みや適切なリズムとテンポで弾けるようになったなど、MIDI 演奏データを活用した効果の一部を学生が感得できたとされる（小倉、2006）。また、ミュージックラボラトリーによるピアノの授業において初心者の自学自習を支援する一つの方策としてPCソフトウェアの活用を検討した調査研究では、画面の表示が遅れたりテンポが乱れたりといった問題点もあるものの、レッスン終了後に自分の演奏が正しかったかどうかの判断が点数表示され、合否が示されるレッスン判定機能がとりわけ有用であることが報告された（小倉、2010）。

これらの一連の報告研究を眺めると、情報技術の進展とともに音楽教育の方法の可能性が広がることが十分にうかがわれる一方で、それぞれの技術、手段に由来する限界など、

いくつかの問題も伴うことがわかる。もっとも、これらの調査研究における効果検証の方法は主に学生による自由記述や質問紙調査であることから、統計処理等の方法を用いた客観的な効果検証によりその妥当性を補完していく必要性は今後も考えられる。

2010年代になると、携帯電話などのモバイル端末を利用する音楽教育実践の調査研究報告が目立ってくる。初心者の学習を支援する目的で教師の模範演奏を受講生に提供する試みを継続的に行ってきた延長で、①提供するメディアのPCから携帯電話への移行、②eラーニングの基盤の導入について検討した小倉ら（2011）は、学生が教師の模範演奏を聴くだけでなく自身の演奏を振り返り、学習者間の声がけによりモチベーションを維持するという効果も期待できると結論している。また、学生からの子どもの歌の弾き歌いをビデオで提供してほしいという要望を踏まえ模範演奏のサンプル映像データを手持ちの機材で録画しネット上にアップロードした試みでは、学生アンケート結果から端末の画質・音質はこれらの学習目的に必要な十分であること、模範演奏の動画を提供することが学生の学習に有用であることが明らかになったと結論された（小倉、2012）。こうした試みでは動画の演奏速度を変えられないなどの課題があったが、最近の研究調査報告ではネットレッスンシステムの活用により、こうした課題が克服可能であることが示されている。ヤマハ株式会社より試用許諾を得られた「ヤマハミュージックレッスンオンライン」によって可能となった、①講師の模範演奏および演奏の注意事項を解説したビデオ視聴、②受講者による自身の演奏を録画した動画の講師への送信、③講師からメールまたは動画でのアドバイスの返信、という複合的なレッスンシステムは、動画の再生速度も変更でき特定の部分だけ繰り返し再生することも可能であり、上述の課題を克服するものとして試用された（小倉、2014）。こうした取り組みは、初心者には好評だった一方で、楽譜の形式が授業で使っているものと異なる点や操作が難しい点が問題とされたが、使用された楽譜に指使いと弾き歌い方のアドバイスが記入されている点など、本学が構想する音楽教育の改善にとって学ぶべきところの多い調査研究報告である。

eラーニング、ICTを活用した音楽教育実践についての研究報告には、他にも中平勝子らのものがある。中平・赤羽・深見（2010）は、eラーニング教材を取り入れピアノ弾き歌い指導の授業デザインの変化によって、学生のピアノ弾き歌い能力向上が見られるかについての実践研究を行っている。結果として、個別練習におけるICTの二種類の活用の仕方（一つは映像の撮影、自己演奏の振り返り、教師への提出という活用の仕方であり、もう一つは模範演奏の閲覧という活用の仕方）によって学生の演奏能力向上に差が見られたことが示されている。また、中平・赤羽・深見（2012）はピアノ弾き歌い教育の質保証という観点から、100人規模の学生を相手に授業を行うピアノ弾き歌い教育に対してICTを活用した教育デザインを提唱し、それに基づいた実験を行っている。その授業デザインの内容は、①模範演奏の閲覧、②eラーニング教材による学習、③自身のピアノ弾き歌い演

奏映像の提出、というように先述の小倉（2014）の試みと類似しているが、模範演奏の閲覧は学生のイメージトレーニングの一助となり表現力の向上に効果があるということ、模範演奏と自身の映像を比較した時に対面指導では気づきにくい演奏状態の悪さに初めて気付くという利点があるということを示している点が本研究の重要な点である。また、授業内容・履修者数等で本学と非常に共通点が多いため、本学での取り組みにとっても大いに参考となるものであった点は付言しておきたい。本研究に対してあえて視点を加えて述べれば、模範演奏という出来上がった状態の映像だけでなく曲を仕上げているための途中過程、例えば練習方法や運指のポイントなどを加えることで更に利用効果が上がることも考えられること、また、初心者向けには楽典的な要素も取り入れた「音楽の基礎力」を向上させる教材を取り入れる必要性を考慮する必要性があることも可能性として指摘しておきたい。

eラーニングやICTを活用する教育実践は音楽教育に限らず今後も大きな可能性を秘めたものとして期待されるが、今回の調査研究は「保育者養成課程における音楽教育」に主題を限定し、本学の音楽教育改善のための調査研究の一步として取り組まれた。はじめに述べたように、改善の方向性に関してはニーズ調査に基づく改善案の構想、試み、その効果の検証が不可欠であるが、本稿における調査報告は、その最初の段階に位置づけられるものである。

## 方 法

### 1. 調査対象者

作新学院大学女子短期大学部幼児教育科に在籍する1年生131名、2年生138名を対象とした。

### 2. 調査時期

2015年7月に調査を実施した。

### 3. 調査手続き

1年生、2年生ともに音楽に関する必修科目の授業の中で、授業担当者が一斉配布し、その場で回収した。アンケートはマークシートおよび自由記述から構成され、無記名式で実施した。255名分のアンケートが回収され、回答率は95%であった。

### 4. 調査内容

アンケートの項目は著者間で検討し、独自に作成した。内容は主に本学以外での鍵盤楽器のレッスンに関することと、本学でのピアノ教育へのニーズである。本学における鍵盤楽器の教育は主にピアノを用いて行われるが、学生がこれまで通ったことのあるレッスンや所持している鍵盤楽器はピアノの他にも考えられるため、アンケートではピアノに限定せずに鍵盤楽器という言葉を用いた。

鍵盤楽器に関する具体的な質問内容は、1) 習い始めた時期(単一回答式)、2) レッスンにかかっている費用(単一回答式)、3) レッスン先(単一回答式)、4) これまでのレッスン歴(単一回答式)、5) 所有している鍵盤楽器(複数回答式)、6) 就職後のレッスン予定(単一回答式)、7) 本学の音楽教育で利用してみたいサービス(複数回答式)、8) 自由記述の8項目であった。質問項目の詳細を付録1に示す。

## 5. 分析方法

回答ミスや、項目間で回答に矛盾があるデータ(たとえば、鍵盤楽器を習ったことがないと回答している一方で、月々のレッスン費用がかかっていると回答しているものなど)を分析から除外した。その結果、有効回答数は244名分であり、有効回答率は97%であった。

有効回答について、項目1～7の単純集計を行った。また、より詳細なニーズを把握するために、項目7については「学年」や「レッスン歴」によるクロス分析を $\chi^2$ 検定で行った。分析にはSPSSバージョン20を使用した。

## 6. 倫理的配慮

アンケート実施時に口頭および書面にて、1) 調査への回答が自由意思にもとづくこと、2) 回答結果は成績評価には全く関係しないことなどについて説明した。

## 結果と考察

### 1. 鍵盤楽器のレッスンを始めた時期

本学以外で鍵盤楽器を習い始めた時期について尋ねた。結果を図1に示す。本学に合格する前と回答した学生が180名と最も多く、全体の74%に上った。次に多かったのが、本学以外で鍵盤楽器を習ったことがない学生で29名であった。次いで、入試で本学に合格してから鍵盤楽器のレッスンに通い始めた学生が25名、本学に入学してからレッスンに通い始めた学生が10名であった。

これらの結果から、本学に在籍している学生の多くが、受験前からレッスンに通っていたことがわかる。これらの学生は、もともと習い事として鍵盤楽器のレッスンに通っていたり、保育者を目指した時点からレッスンを始めた学生であると考えられる。一方で、入試で本学に合格してから鍵盤楽器のレッスンに通い始めた学生も相当数おり、保育者への道が開かれた時点からレッスンを開始した学生と言える。本学に入学してから学外のレッスンに通い始めた学生についてはさまざまな理由が考えられるが、本来は学外でのレッスンに通うつもりがなかった学生と言えるかもしれない。言い換えれば、本学でのレッスンで困り感を抱え、落ちこぼれぬようにレッスンに通い始めた学生であり、本学の目指す音楽教育ではこれらの学生も救えるものであることが期待される。本学以外で鍵盤楽器を習ったことがない学生についても、さまざまな理由が考えられる。本学の授業やレッスン室を利用した自主練習のみで事足りている学生もいれば、経済的な理由等で学外のレッス

ンに通えない学生もいよう。これについては今後、習熟度も含めた詳細な分析が望まれるところである。

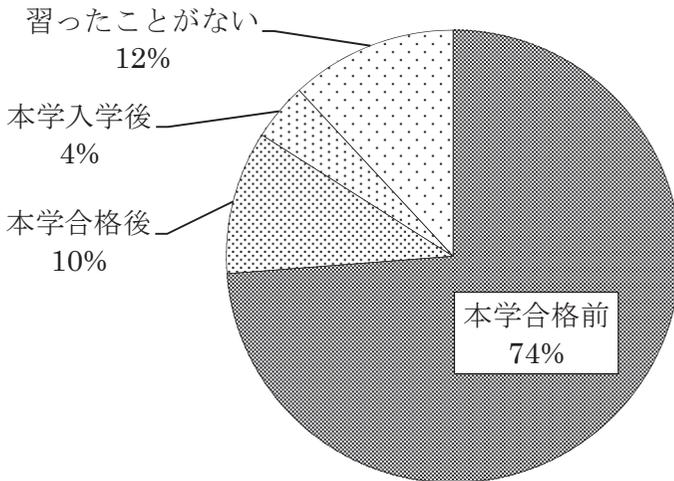


図1 本学以外で鍵盤楽器を習い始めた時期

## 2. 学外のレッスンにかかっている費用

現在、本学以外で鍵盤楽器を習っている人について、月々にかかるおおよその費用を尋ねた。結果を図2に示す。まず、現在レッスンに通っている学生は103名であり、全体の42%であった。そのうち、月々に6000円から9000円未満の費用がかかっている学生が最も多く、62名であった。次に、6000円未満が32名、9000円以上が9名という順であった。また、現在は学外のレッスンに通っていない学生は141名であった。

本学は私立短大であり、経済的な理由から4年制大学への進学を避けた学生や、早期の経済的自立を目指して2年で卒業できる本学へ入学してくる学生が相当数いる。一方で、在籍が2年間とは言え、私立短大の学費は決して安いものではない。そういった側面から考えると、全体の42%の学生が学外のレッスンに通っているというのは、学生やその家族への経済的な負担になっていると言えよう。本学では種々の奨学生制度を設け、経済的に厳しい学生への支援を充実させているが、学外でのレッスンに費用がかかってしまっただけでは本末転倒である。学生のニーズに応えるには、学外のレッスンに通わなくても済む、あるいは月々のレッスンにかかる費用を抑えられる音楽教育プログラムを開発する必要があるだろう。

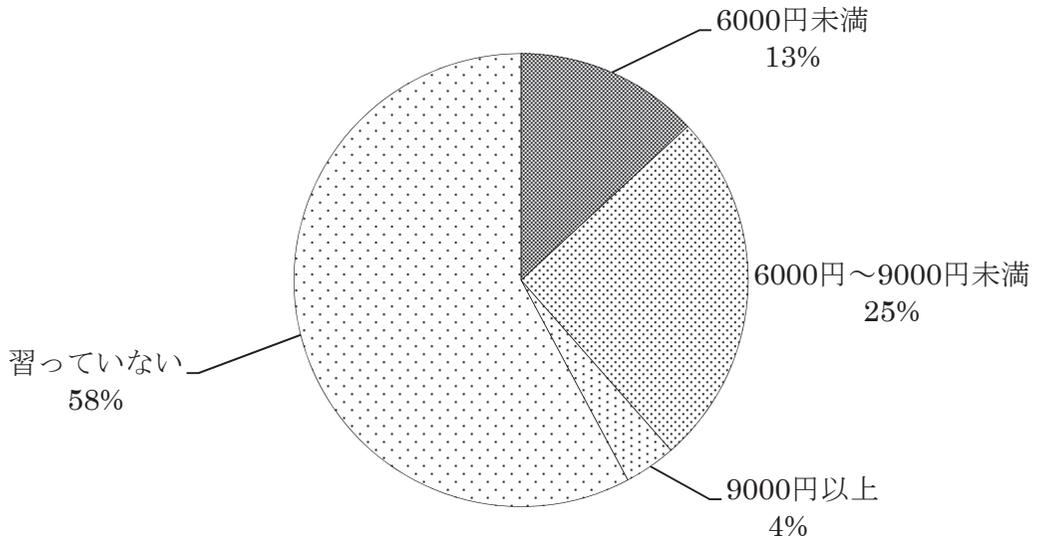


図2 現在、学外のレッスンに月々かかっている費用

### 3. 学外のレッスン先

学外で鍵盤楽器を習ったことがある学生に、レッスン先について尋ねた。結果を図3に示す。最も多かったのは個人開業のレッスン教室であり、140名の学生が該当した。その後、ヤマハ音楽教室の43名、カワイ音楽教室の21名という順番であった。また、高校の先生に習ったという学生も6名いた。その他を選んだ学生は5名であり、自宅で親戚から習ったり、保育園の音楽教室で習ったという回答であった。

この結果から、本学の6割近い学生が個人のレッスン教室で鍵盤楽器を習っている、あるいは習ったことがあるというのがわかる。一方で、大手の音楽教室に通った経験がある学生はカワイ音楽教室とヤマハ音楽教室を合わせても4人に1人程度に留まる。栃木県という地理的な要因もあり、遠方の大手音楽教室に通うより、より近所にある個人開業のレッスン教室に通う学生が多いと考えられる。

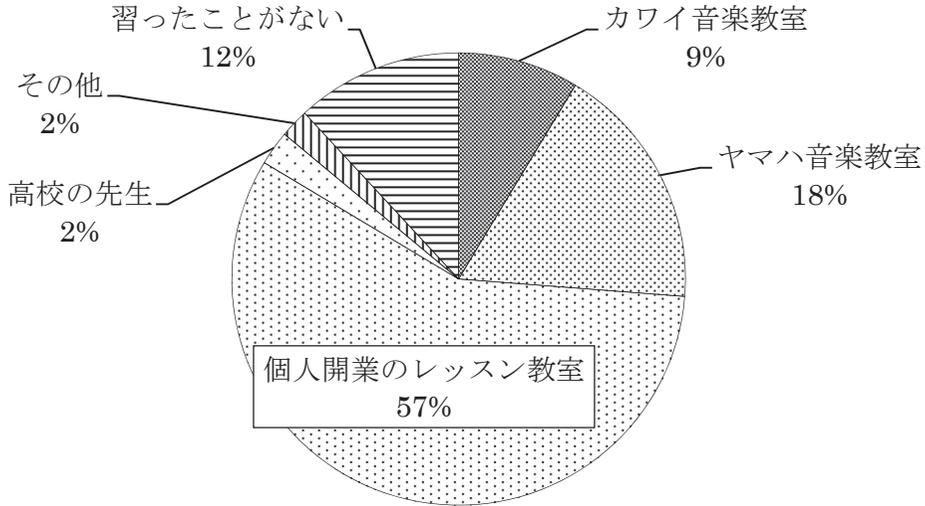


図3 学外のレッスン先

#### 4. 学外におけるレッスン歴

学外で鍵盤楽器を習っていた、あるいは習っている期間について尋ねた。結果を図4に示す。最も多いのが7年以上のレッスン歴がある学生で、76名に上った。次が5～6年間のレッスン歴で、45名であった。その後、1～2年間の41名、1年未満の30名と続き、最も少ないのが3～4年間の23名という構成であった。

全体的な構成を見ると、学生が大きく二分されることがわかる。学外でのレッスン歴が5年以上ある学生が全体の50%を占めるのに対して、2年以内のレッスン歴の学生は29%であり、習ったことがない学生と合わせると41%に上る。つまり、本学の学生は鍵盤楽器の経験者と初心者に分かれ、中間層が最も少ないという構成になっていることがわかる。鍵盤楽器の経験者は、その経験が保育者を志す一つの理由になったと考えられる。一方で、初心者の学生は保育者へのスタートラインに立ったところから鍵盤楽器のレッスンを始めたと考えられ、両者の実力差は非常に大きいと言える。この実力差をカバーするために、本学では鍵盤楽器の習熟度別にクラス分けをし、学生それぞれの進度に合わせた週1回15分～20分程度の個別指導を行っている。しかしながら、多忙な短大生活の中であって、集団指導の中で音楽の基礎的知識や技法を身に付け、週1回15分～20分の個別指導で保育者に最低限必要とされる50曲程度の童謡を弾き歌いできるようになるには、学生にも相応の努力が必要とされる。本学学生の4割を超える鍵盤楽器の初心者に対して、学内の音楽教育の中でどれほど効率的に知識や技術を提供できるかが、今後の課題であると考えられる。

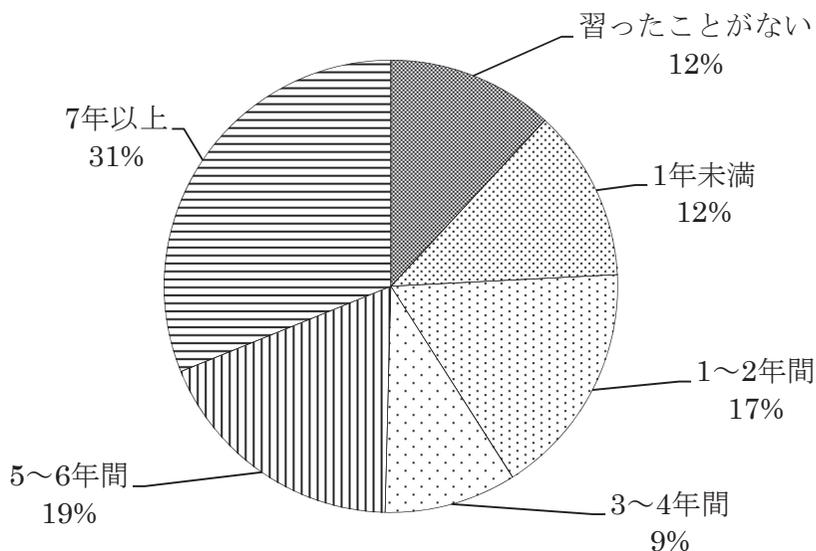


図4 学外におけるレッスン歴

## 5. 自宅で所有している鍵盤楽器

自宅にある鍵盤楽器について、複数回答形式で尋ねた。結果を図5に示す。なお、複数回答形式であるため、図5のデータラベルは上段に度数、下段にパーセンテージを記した。自宅にある鍵盤楽器で最も多かったのは電子ピアノで、132名の学生が所有していた。次に多かったのはピアノであり、92名であった。その後にキーボードの52名、エレクトーンの21名という順位であった。その他を選んだ学生2名については、いずれも「オルガン」とのことであった。何も鍵盤楽器を持っていない学生は1名のみであった。

既述したように、今回の調査では学外で鍵盤楽器を習ったことがない学生が29名いた。しかしながら、1名を除いて全ての学生が何らかの鍵盤楽器を所有していることから、保育者を目指すにあたって多くの学生が鍵盤楽器を購入したことがうかがえる。つまり、ほぼ全ての学生宅で自主練習のための環境が整っており、いかに効率的に自主練習を進めることができるのかということが重要なポイントであることがわかる。また、所有している鍵盤楽器のうち、電子ピアノ、キーボード、エレクトーンなど、いわゆる「電子楽器」が7割近くを占め、本学が進めようとしている「ICTを利用した音楽教育」に馴染みやすい環境があると言えよう。

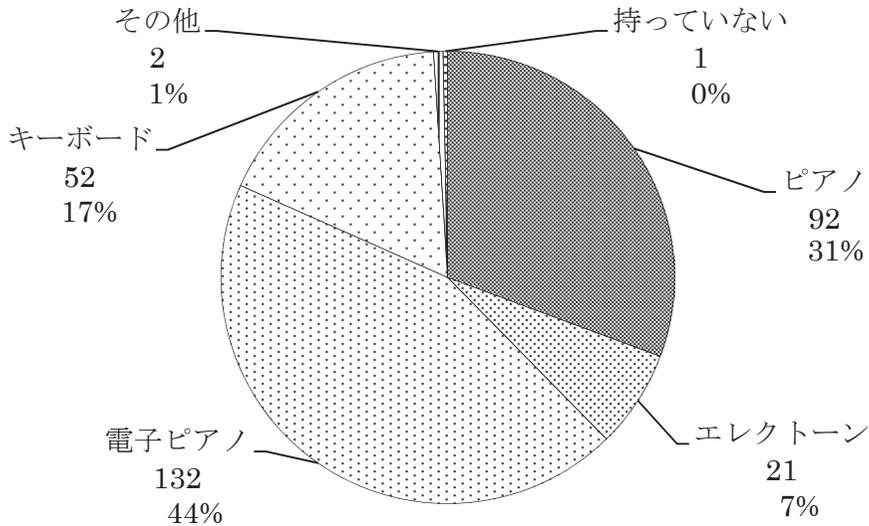


図5 自宅で所有している鍵盤楽器

## 6. 就職後のレッスン予定

就職後にレッスンに通う予定があるかについて尋ねた。結果を図6に示す。レッスンに通う予定があると回答したのは23名であった。その他の221名については、現時点では通う予定がないという回答であった。

レッスンに通う予定があると答えた学生の内訳を見てみると、学外でのレッスン歴が2年以内の学生が16名を占めた。全体から見ると決して大きいニーズとは言えないが、就職後のピアノ技術に不安を抱える学生をフォローすることは、保育者養成課程の責務であると同時に、現場への貢献、つまり地域貢献にもつながるサービスであると考えられる。どのような形でこのようなニーズに応えていくことができるのか、今後十分に検討される必要があるだろう。

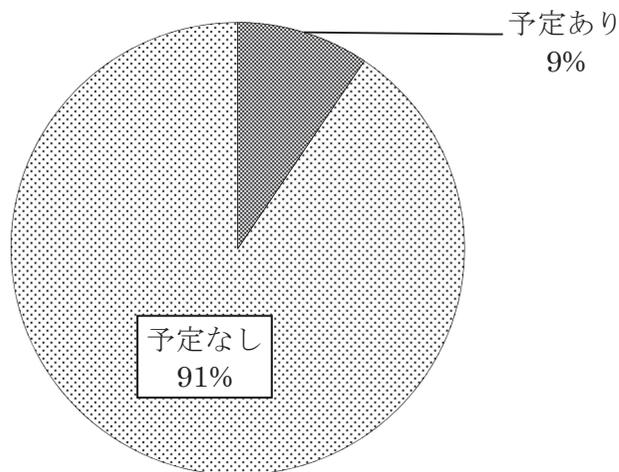


図6 就職後のレッスン予定

## 7. 利用したい音楽教育のサービス

本学にあったら利用したい、あるいは利用したかった音楽教育に関するサービスについて、複数回答形式で尋ねた。結果を図7に示す。データラベルの上段は度数を表している。最も多かったのは教員による弾き歌いの模範演奏動画で、105名の学生が選択した。次に多かったのが放課後に安価で受けられる学内のレッスンで84名であった。その後、弾き歌いの際のポイントが書かれている注釈付楽譜の79名、自らの演奏を採点してアドバイスをくれるスマートフォンのアプリの52名、合格後から入学前まで利用できる大手の音楽教室割引券の25名、自宅で受けられるオンラインを利用したレッスンの25名という順位であった。これらの選択肢に利用したいサービスがないと回答した学生は57名であった。

これらのうち、模範演奏動画、注釈付楽譜、採点アプリは、効率的に自主練習を進めるためのサービスであり、合計でニーズの半分以上を占める。すでに述べたように、多くの学生の自宅には自主練習をするための環境が整っている。また、本学における現行の音楽教育のシステムでは、週1回の個別指導をどれだけ有効活用できるかが重要になってくる。自主練習を効果的に進めるためのサービスに対するニーズの高さは、このような現状を反映したものであると考えられる。

一方で、学内レッスン、オンラインレッスン、音楽教室割引券は、いずれもレッスン形態のサービスである。現在、本学では授業時間外の有料のレッスンは開講していない。しかし、レッスン形態のニーズの中では、放課後に受講できる学内レッスンへのニーズが最も高かった。授業が終わった後にピアノ教室へ行くことなく、そのまま学内施設を利用したレッスンへのニーズは、思いのほか高いようである。また、幼児音楽や弾き歌いに特化

したレッスンを行ったり、学生の様子を知っている学内の音楽教員がレッスンを行なえば、教育効果としても高いものが得られると考えられる。さらに、学内レッスンであれば学生が移動に使う時間を減らすことができ、多忙な毎日を送っている本学学生の負担を減らすことにもつながる。同様のことが、オンラインレッスンにも言えよう。自宅に居ながらリアルタイムでオンラインレッスンが受けられれば、移動の負担が減らせる。加えて、本学の施設を使うわけではないので、レッスンを受けることによって学生の自主練習用のピアノが足りなくなるという事態も避けられる。音楽教室割引券は、入学前のニーズということになる。入学前は本学の提供する教育サービスを受けることはできないが、それを補完するものとして一定のニーズがあると言えよう。

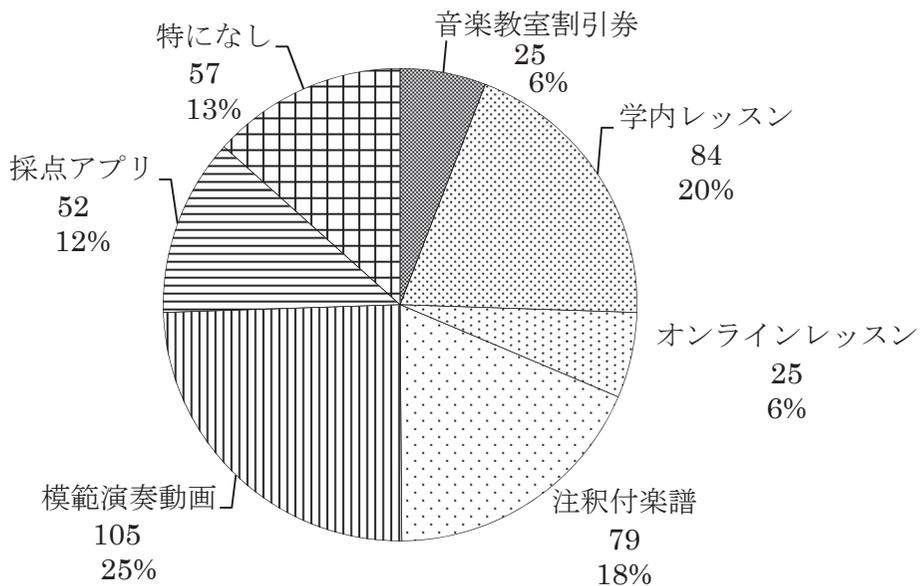


図7 利用したい音楽教育のサービス

## 8. 学年と音楽教育サービスへのニーズの関連

学年ごとに各音楽教育サービスへのニーズに違いがあるかを検討するために、学年と各音楽教育サービスのニーズについて、2要因（2×2）のクロス分析を $\chi^2$ 検定で行った。その結果、学内レッスン（ $\chi^2(2)=4.29$ 、 $p<.05$ ）および採点アプリ（ $\chi^2(2)=8.96$ 、 $p<.01$ ）において学年との関連が有意であった。次に、どのセルにおいて有意な関連が認められるのか検討するため、残差分析を行ったところ、全てのセルで有意な関連が認められた。結果を表1に示す。

学内レッスンへのニーズでは、2年生のニーズが有意に高くなっていた。一方で、1年生のニーズは有意に低くなっている。これについて、実習経験や現場に出るまでの期間の差が原因として考えられる。本アンケートを実施した時点で、2年生の大部分はすでに6

週間に及ぶ実習を経験している。一方で、1年生は一度も実習を経験していない。実習では部分実習や責任実習の中でピアノの弾き歌いをする機会が多くあり、学生たちはたくさんの幼児の前で弾き歌いすることの難しさに直面することとなる。それに加え、卒業して現場に出るまで残すところ半期のみであり、それまでに即戦力となる技術を身につけなければならないという焦りもあろう。こういった困難感の経験や、そこからくる焦りなどが、学内レッスンへのニーズの差として現れたと考えられる。

一方で、採点アプリへのニーズは、逆の結果となった。1年生においてニーズが有意に高くなり、2年生では有意に低くなっていた。これについても、やはり実習経験や現場に出るまでの期間が影響していると考えられる。実習における困難感をまだ経験しておらず、卒業まで期間がある1年生には、レッスン形態へのニーズよりも自主練習のサポートに関するニーズが高いと考えられる。

表1 学年とニーズのカイ二乗検定結果 (n=244)

ニーズ	学年		$\chi^2(1)$	
	1年	2年		
学内レッスン	あり	35名 (-2.1)	49名 (2.1)	4.29*
	なし	89名 (2.1)	71名 (-2.1)	
採点アプリ	あり	36名 (3.0)	16名 (-3.0)	8.96**
	なし	88名 (-3.0)	104名 (3.0)	

( )内は調整済み残差を記載。 \*\*: $p<.01$  \*: $p<.05$

## 9. 経験と音楽教育サービスへのニーズの関連

経験の差で各音楽教育サービスへのニーズに違いが出るかを検討した。まず、学外におけるレッスン歴の項目をもとにして、レッスン歴が0～2年間の学生を「初心者」、3年以上の学生を「経験者」として群分けを行った。初心者には100名、経験者には144名の学生が該当した。次に、経験と各音楽教育サービスのニーズについて、2要因(2×2)のクロス分析を $\chi^2$ 検定で行った。その結果、音楽教育割引券( $\chi^2(2)=6.10$ ,  $p<.05$ )、学内レッスン( $\chi^2(2)=4.31$ ,  $p<.05$ )および音符付楽譜( $\chi^2(2)=4.50$ ,  $p<.05$ )において経験との関連が有意であった。さらに、どのセルにおいて有意な関連が認められるのか検討するため、残差分析を行ったところ、全てのセルで有意な関連が認められた。結果を表2に示す。

表2 経験とニーズのカイ二乗検定結果 (n=244)

ニーズ	経験		$\chi^2(1)$	
	初心者	経験者		
音楽教室 割引券	あり	16名 (2.5)	9名 (-2.5)	6.10*
	なし	84名 (-2.5)	135名 (2.5)	
学内レッスン	あり	42名 (2.1)	42名 (-2.1)	4.31*
	なし	58名 (-2.1)	102名 (2.1)	
注釈付楽譜	あり	40名 (2.1)	39名 (-2.1)	4.50*
	なし	60名 (-2.1)	105名 (2.1)	

( )内は調整済み残差を記載。

\*:  $p < .05$

音楽教室割引券、学内レッスン、注釈付楽譜のいずれのニーズにおいても、初心者のニーズが有意に高くなり、経験者のニーズは有意に低い結果となった。経験者に比較して、初心者の学生は音楽教育サービスへのニーズが、全般的に高いことを意味しているよう。音楽教室割引券は入学前のサービスであり、初心者の学生の中には合格した時点から鍵盤楽器を習い始めた、あるいは習いたかった学生が多いと考えられ、そのニーズを反映しているものと考えられる。学内レッスンは入学後のサービスであり、これについては初心者の4割以上の学生が選択した。一方で、経験者では3割弱に留まった。すでに鍵盤楽器のレッスン歴が長く、ある程度技術が身につけている学生が、鍵盤楽器のレッスンよりも他の知識や技術を獲得するために時間を割きたいと考えるのは自然であり、この結果にもそのようなニーズが反映されていると考えられる。注釈付楽譜は自主練習を効果的に進めるためのサービスであり、これについても初心者の学生のうち4割が選択した。そして、経験者の学生では3割弱に留まった。注釈付楽譜については、上級よりも初級の楽譜において必要であるということが先行研究で示唆されている(小倉、2014)。当然のことながら、初級の楽譜は初心者が使うことが多く、上級の楽譜は経験者が使うことが多い。経験者が使う上級用の楽譜で全ての音符に指使いが記載されていると、弾き歌いの習得の妨げとなる可能性も考えられ、教育効果の測定をする際には適性処遇交互作用を考慮した検討が求められよう。

## 総合考察

本研究では、全学生を対象に「作短 音楽教育アンケート」を実施して、本学の鍵盤楽器教育の改善を期して音楽教育サービスへのニーズ調査を行った。ここでは、学外でのレッスン状況と音楽教育へのニーズを中心に考察する。

### 1. 学外でのレッスン状況

調査時点で、学外でのレッスンに通っている学生は4割を超えている。また、これまでに学外レッスンに通ったことがある学生も含めると、9割近くに達する。すなわち、学内での正規のレッスン以外にもレッスンの需要があることが明らかになった。なお、学外でのレッスンを受けたことがある者のうち6割近い学生が個人開業のレッスン教室である。

さらに、ほぼ全ての学生が、電子ピアノ、ピアノ、エレクトーン等の鍵盤楽器を有しており、自宅での鍵盤楽器の学習環境が整っていることも明らかになった。

学外でのレッスン歴を比較すると、5年以上習っている学生が5割、3～4年が1割、2年以内あるいは習ったことがない学生が4割であり、「経験者（3年以上）」と「初心者（2年以内）」に二分されることが明らかになった。

### 2. 音楽教育へのニーズ

学生の音楽教育へのニーズは、多い順に、教員による弾き歌いの模範演奏動画（25%）、学内のレッスン（20%）、注釈付き楽譜（18%）である。この結果は、学生のニーズとして、学外でのレッスンに通うことなく、学内および自宅でのレッスンで鍵盤楽器の技術の上達を促す音楽教育プログラムを開発する必要性を強く示唆している。

弾き歌いの模範演奏動画に関しては、学生のニーズが最も高く、本学として最初に取り組むべき課題である。

学内レッスンは、初心者のニーズが高いが、初心者がより多くのレッスン時間を必要としていることの反映と考えられる。また、学内レッスンは、2年生のニーズが高く、1年生のニーズが低い。これは、2年生の場合、本学所定の課題曲以外に、実習や就職試験の課題曲のレッスンの必要があることが影響していると考えられる。但し、正規外の学内レッスンの実現に当たっては、より詳細なニーズ調査と、実現可能性の精査が必要である。

注釈付き楽譜は、初心者のニーズが高く、本学所定の課題曲を初心者が自主練習するためには、必須の教材と考えられる。

### 3. まとめ

本研究により、本学の鍵盤楽器教育の改善に必要なものが明らかになった。特に、模範演奏動画と注釈付き楽譜の提供が必要であることが明らかになった。この二つが提供できると、初心者のレベル向上に寄与し、さらには、本学学生全体の鍵盤楽器の技量を高めることに寄与すると思われる。

模範演奏動画に関しては、本学所定の課題曲を動画で記録（演奏の様子と手元）し、DVDやインターネットを通じて提供すれば、本学内のピアノレッスン室や自宅での自主練習に活用できる。インターネットを通じての配信に関しては、先般、AppleのiTunesUのアカウントを本学として取得して、配信のための準備が始まっている。また、注釈付楽譜については、本学音楽科として、基礎的な研究と実践が始まっており、初心者の方の技量向上に寄与し始めている。

今回のニーズ調査を手始めに、本学の鍵盤楽器教育の改善のための研究を推進する予定である。

## 付 記

第一著者が「方法」「結果と考察」、第二著者が「はじめに」、第三著者が「総合考察」の執筆を担当した。

## 引用文献

- 中平勝子・赤羽美希・深見友紀子(2010). ブレンデッドラーニングを取り入れたピアノ弾き歌い指導の改善 日本教育工学会論文誌, **34**, 45-48.
- 中平勝子・赤羽美希・深見由紀子(2012). ピアノ弾き歌い教育の質の保証 日本教育工学会論文誌, **36**, 291-299.
- 小倉隆一郎(2005). 音楽レッスンにおける e ラーニングの活用 秋草学園短期大学紀要, **22**, 145-155.
- 小倉隆一郎(2006). 音楽授業における MIDI 演奏データの活用-ネットワークとフロッピーディスクを利用する 文教大学教育学部紀要, **40**, 43-53.
- 小倉隆一郎(2007). Music Laboratory を用いた初心者へのピアノ指導: 読譜力の向上に着目して 文教大学教育学部紀要, **41**, 73-81.
- 小倉隆一郎(2010). 初心者のピアノ学習を支援する PC ソフトウェア 文教大学教育学部紀要, **44**, 121-128.
- 小倉隆一郎(2012). ML 学習に演奏モデルを活用する試み: 学習者に子どもの歌の弾き歌い映像を提供する 文教大学教育学部紀要, **46**, 77-84.
- 小倉隆一郎(2014). 子どもの歌の弾き歌い学習におけるネットレッスンの活用 教育学部紀要, **48**, 137-144.
- 小倉隆一郎・田中功一(2011). モバイルラーニングを利用したピアノ学習 文教大学教育学部紀要, **45**, 123-130.

## 付録 質問項目

### 作短 音楽教育アンケート

このアンケートは、作短の音楽教育をより良くするためにを行います。成績には全く関係ありませんので、素直な気持ちで教えてください。

以下の質問に対して、もっともあてはまる回答のマークを、**ぬりつぶしてください**。

- ① これまで、作短以外で鍵盤楽器を習ったことがある人は、**習い始めた時期**を教えてください。
- 作短合格より前                       作短合格後から入学までの間       作短入学後  
 習ったことがない
- ② 現在、作短以外で鍵盤楽器を習っている人は、月々にかかるおおよその費用を教えてください。
- 6000 円未満                       6000 円以上～9000 円未満       9000 円以上  
 習っていない
- ③ 作短以外で鍵盤楽器を習ったことがある人は、どのようなところで習っている（習っていた）か教えてください。
- カワイ音楽教室                       ヤマハ音楽教室                       個人の教室  
 高校の先生                       その他（                      ）       習ったことがない
- ④ 作短以外で鍵盤楽器を習ったおおよそのレッスン歴を教えてください。
- 0 年                       1 年未満                       1～2 年間  
 3～4 年間                       5～6 年間                       7 年間以上
- ⑤ 自宅にある鍵盤楽器を教えてください。
- ピアノ                       エレクトーン                       電子ピアノ  
 キーボード                       その他（                      ）       自宅に鍵盤楽器はない
- ⑥ 就職してから、鍵盤楽器のレッスンに通う予定はありますか。
- はい                       いいえ
- ⑦ 以下の中で、もしあったら利用したい（利用しなかった）ものは、どれですか。**あてはまるもの全て**をぬりつぶしてください。
- 作短合格後から、入学前まで使える大手ピアノ教室の割引券  
 放課後に作短で受けられるピアノレッスン（安価）  
 自宅で受けられるピアノレッスン（オンライン、安価）  
 注釈（注意すべきところ）付の楽譜（無料）  
 作短の先生が演奏（弾き歌い）しているお手本動画（ネットで視聴可、無料）  
 カラオケのようにピアノ演奏を採点してアドバイスをくれるスマホアプリ（無料）  
 特に利用したいと思うものはない

- ⑧ 上記以外で、「こういうのがあったらいいのに」という音楽教育に関することを自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。